

重要文化財のはきもの

日本はきもの博物館学芸員 武知邦博

■はじめに

日本はきもの博物館は、我が国唯一のはきもの専門の博物館である。収蔵する資料は13,000点を超えるが、そのうち2,266点が重要有形民俗文化財として国より指定を受けている。その内容は「下駄類」、「草履類」、「草鞋類」、「藁沓類」、「和沓や洋靴といった「くつ類」、「足袋類」、「足桶類」、「かんじき類」、「踏俵類」、「スキー、スケート類」、「竹馬、筒下駄類」、引札（チラシ）や看板といった「商業用具類」である。

中には今でも見ることができそうなものも含まれるこれらの資料は、一点一点が美術品のように稀少で高価なものとは言えない。しかし、2,266点という一括したはきものコレクションが、私たちの日常生活を後世へ伝えるための「民具」としての文化財なのである。

今回、現在ではなかなか見ることができなくなったはきものを20点程紹介する。

■下駄類

【1】には鼻緒は無いが、ジュラルミン



【1】ジュラルミン製の下駄

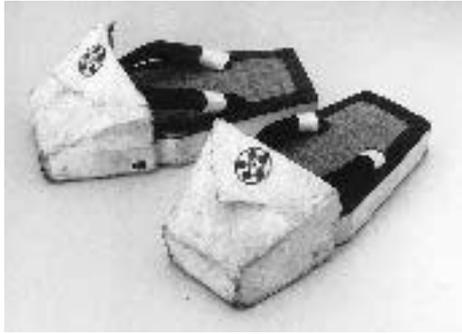
製の子ども用の下駄で、戦後間もなく製造されたものである。ジュラルミンは軽く丈夫で、現在でも航空機やトランクケースに使用される金属である。太平洋戦争下の日本でも戦闘機などに利用されていたが、終戦に伴い廃棄され、木材の代用品として下駄に再利用された。丈夫な金属であるため、台や歯は私たちが普段見る下駄と違い、長さ181mmの台の厚さは3mm、歯の厚さは6mmととても薄く、一足の重さは244gである。



【2】シューズ型下駄

【2】は昭和12、3年頃、広島県福山市で使用された子ども用の下駄である。このような下駄の形状をシューズ型と言う。昭和初期に考案されたデザインで、靴の特長を下駄に取り入れたものである。長さ182mm、一足の重さ340gのこの下駄は子ども用の下駄であるが、昭和初期、シューズ型は子どもから大人まで幅広い年齢層の女性に、新しいファッションとして履かれていた。

【3】は東大寺二月堂のお水取で履かれるサシカケである。この資料は昭和52年まで使用されたもので、松の台にイ草の畳を



【3】サシカケ

上面に、側面には白い和紙が張られている。爪先部分の爪掛にも和紙が用いられるが、この爪掛部分の和紙には、つぶした白墨を水で溶いた液体を塗って固めてあり、紙という質感ではない。長さ270mm、一足の重さ1,217gである。

江戸時代の俳人、松尾芭蕉がお水取りを詠んだものに「水取や氷の僧の沓の音」との句があり、現在、下駄型のサシカケが、元は沓くつだったと言われている。

【4】は富山県の砺波となみ地方を中心に履かれたユキゲタである。長さ224mm、一足の重さ566gの女性用のこの下駄は、雪の中の歩行用であり、滑り止めにスパイクの役割をする金具が前後の歯に付いている。歯と歯の間に雪が詰まってしまうように、台の形状もユニークで、さらに鼻緒の結び目が雪と接触しないよう、くり抜かれた台の内部に収まっている（写真右は底のフタをずらして撮影）。雪国の生活用に多



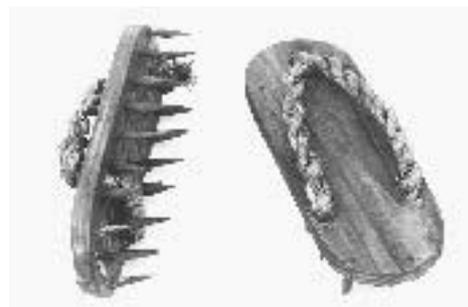
【4】ユキゲタ



【5】カブキリゲタ

くの工夫が施されたはきものであるが、道路の舗装化に伴い消滅した。

【5】は田で使うはきものである。田で使う下駄といえば、ぬかるみに足を埋もれないようにする田下駄があるが、これはそうではない。松の台にU字形の鉄製の刃が付いており、米の収穫後に稲の古株を十字に踏んで切り、春の田おこしがしやすいようにする物である。台の長さ228mm、一足の重さ745g、秋田県の東成瀬村で使用され、カブキリゲタと言われている。



【6】ネズラゲタ

【6】は海で使うはきものである。杉の台に竹製の突起が全面に取り付けられている。新潟市赤塚の遠浅の海で、ネズラと言われる小さいヒラメを踏みつけて捕る。これを使うとネズラはあなだらけになって、商品としての価値は無くなるため、女性や子どもが自分の家で食べるために使ったと言われる。昭和20年頃まで使用されていた。長さ205mm、一足の重さ206g。なお、こ

の資料は新潟市郷土資料館所蔵の資料の複製である。

■草履類



【7】フジジョリ

日常もっとも使用された草履は藁で作られることが多かった。稲作に不向きな地域や用途によっては、草履を藁以外の素材で作ることもあった。

【7】は長さ253mm、一足の重さ118g、岐阜県美山町で明治中頃まで使用されたフジジョリと言われる草履である。植物の蔓を編んだもので、夏の普段履きとして家の近くではこれを履いたと言う。



【8】アダンサバ

【8】は沖縄県石垣島で作られたアダンサバである。サバは草履を意味する。アダンという植物の葉で編まれた草履である。長さ230mm、一足の重さ163g。藁サバ(草履)は海や山の労働用に用い、この美しいアダンサバは訪問用や式で使用するものであった。工程にひと工夫あって、アダンの葉は海水に繰り返し浸して強くしてから使ったと言う。

この他にも地域や用途により、竹の皮やガマ、トウモロコシの皮など様々な素材で



【9】ゴムゾウリ

草履は作られる。こういった普段履く草履は自分達で作るものである。

【9】は台と鼻緒が一体成型された昭和初期のゴムゾウリである。長さは101mm、一足の重さ270gの子ども用である。このようなゴムゾウリを発明したのは、広島県の教員であったという興味深い話がある。昭和の初めに教員をしていた長谷川幸作さんは、子どもが宿題をしてこないことが悩みの種だった。子どもの家を訪ね「宿題を見てやってほしい」と頼むが、「夜は明日の草履を作らなければならない」と言われる。それならばと、ゴムの台にゴムの鼻緒を取り付けた、耐久性の高い草履を発案。完成したゴムゾウリを子どもが喜んだのはもちろん、丈夫で耐水性もあることから農漁村や一般の労働者から大きな需要があり、各社から改良品などが製造販売された。戦争によりゴムは統制品となるが、戦後再び流行し、衰退する昭和30年頃までよく履かれた。

【10】は長さ107mm、一足の重さ62g



【10】アシナカゾウリ

のアシナカゾウリである。小さい子どもが履くものと思われやすいが、大人用である。アシナカは足半と書き、足の前半分しか覆わない。丈夫な踵は地面に触れても構わないという発想である。短さゆえ、濡れたり繊維に土が詰まったりしても重さは草履ほど増加しない。また、足の指も台の外に出る構造をしており、これによって指に力はいりやすく、踏ん張りが効く。この資料は岐阜市で長良川の鵜匠が船中で使用したものであるが、アシナカは他の地域でも畑仕事などに使用された。

■草鞋類



【11】ワラジ

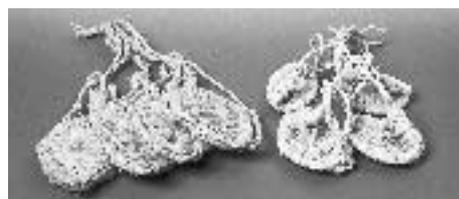
「ワラジ」と聞くと藁草履わらぞうりを想像してしまう人が少なくない。それだけ、草鞋わらじも藁草履も現在の生活からはほど遠いものになってしまった。草鞋と藁草履では形も用途も異なる。藁草履が鼻緒だけで履く、脱ぎ履きのしやすい普段履きであるのに対し、草鞋（【11】）は緒で足全体をしっかりと固定するはきものである。そのため旅や山仕事に使用された。また、



【12】ムシャワラジ

草履は藁以外の素材で作られることもあるが、草鞋には丈夫さが必要なため、藁で作られる。その使用は、より丈夫な“地下足袋”が広まる昭和初め頃まで続いた。

【12】はムシャワラジと呼ばれる。長さ275mm、一足の重さ720gのこの草鞋は、藁で編んだ台の裏に皮が張られ、さらにその皮には全面に鋸が打たれている。この資料は江戸時代、滋賀県五ヶ荘町の武士が使用したと伝えられている。



【13】ウマノクツとウシノクツ

草鞋を履くのは人間だけではない。馬や牛の草鞋もある。

【13】左は長崎県森山町で大正末期まで使用されたウマノクツ。同じく右は、東京都稲城市で使われていたウシノクツ。牛は蹄ひづめが二つに分かれており、ウマノクツとは形状が異なる。労働を助ける牛が、石を踏んで傷つかないように履かせたものである。

■藁沓類



【14】ツマゴ

藁沓は主に雪の中で履かれる。

【14】は岩手県遠野市で作られたツマゴである。藁製で長さ290mm、一足の重さ447g。つかけて履くスリッパのように見えるが、これには鼻緒が存在し、指股で挟んで履く。

【15】は福井県三国町で作られたフカグツである。長さは250mm、高さ102mm、一足の重さは390gであり、雪の中で使用された。



【15】フカグツ

■くつ類



【16】パンプス

【16】は大正末から昭和初期頃のあめ色の革の婦人用パンプスで、1920年代後半に流行したスタイル。長さ238mm、一足の重さ422gである。



【17】生ゴム製の長靴

【17】は新潟県長岡市で収集した、昭和23年の生ゴム製の長靴である。長さ250mm、高さは238mm、一足の重さは1,280gあり、サイズは10.5文。寒さで硬くなってしまい、囲炉裏の火で温め、柔らかくして履くと温かくて気持ち良かったとのことである。

ゴム長靴が再び出回るようになってからは使用されなくなった。

これらは明治以降に西洋より学んだ製靴技術をもとに作る洋靴であるが、我が国在来の和沓というものもある。現在でもその姿を神社の神職や、寺院の僧侶などの足下に見ることができる。



【18】ツナヌキ

【18】は奈良県吉野町で昭和25年まで使われたツナヌキである。長さ255mm、一足の重さは585gの牛皮製で、寒い冬に藁屑わらくずを入れて履く。底の踵部には滑り止めの鋌が打たれている。ツナヌキは猪の皮でも作られる。この資料の使用者は牛皮製は外出用に、猪皮製は雪でも滑らないので野良仕事にと区別して履いたと言う。



【19】ケリ

【19】は北海道白老町のアイヌ民族の鮭の皮で作った沓である。アイヌ語で沓をケリ（ケレ）と言ひ、鮭の皮で作ったケリをシーケリやチップケリと呼ぶ。冬、雪の時かんじきを履いてケリを履き、猟に出る

のに用いたと言う。雪の滑り止めに、鮭の背びれが底にくるように工夫される。長さは245mm、一足の重さ195gである。

■足桶類

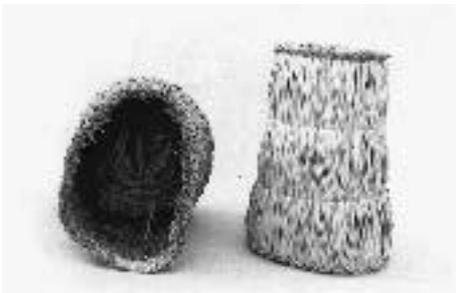


【20】ナンバオケ

足桶は冬の水仕事に防水や防寒に履くものである。

【20】は滋賀県近江八幡市で使われたナンバオケと言われるものである。楕円形で長径が308mm、短径は178mm、高さが362mmあり、一足の重さは3,100gある。この資料の使用者は、昭和18年頃まで田のほとりの水路の泥すくいに使っていた。足桶は東京都から広島県まで見られたが、ほとんど近畿を中心に使用された。

■踏俵類



【21】フミダラ

踏俵は降り積もった雪に、踏み固めて道をつけるのに使われた。

【21】は秋田県平鹿町で使用されたフミダラと言われるもの。中には足のおさまりが良いように、クヅという藁のはきものが入れてある。雪が15cmぐらい積もった早朝、玄関から道路までの道つけや、畑へ大

根を取りに行ったり、屋敷内の井戸の水汲みなど親、子ども誰でもが使用したと言う。

■スキー、スケート類

スキーやスケートは明治時代にヨーロッパより持ち込まれた。現在、スキー、スノーボード、スケートなど、冬のレジャーとして盛んだが、江戸時代末期にも滑り下駄や滑り草履という娯楽があった。



【22】スベリゲタ

【22】は山形県米沢市で昭和44年頃まで製造されていたスベリゲタである。同地ではボーフラとも呼ばれている。長さ202mm、一足の重さ692gの赤い爪革の付いた女兒用で、サワクルミの台の裏に、滑りのための幅20mm程度に割った竹4本が取り付けられている。米沢では幼稚園児から中学生ぐらいまでの子どもが雪道で滑って遊んだということである。また、男児用のスベリゲタはこれとは形状が異なり、高下駄の台に縦方向に帯金をつけたものである。さらに、爪革と鼻緒の色は黒である。

■おわりに

日本の伝統的はきものがバラエティー豊かなことに驚く外国人は多い。先人は用途や地域によって、道具としてはきものを発展させてきた。その過程は、ファッションとしてヨーロッパを中心に発展してきた靴とは異なる。

この拙稿がお読みいただいた方へ何らかの参考になれば、あるいは伝統的なはきものへの興味に繋がれば何よりうれしい。